

2025年度 自己推薦入試

試験問題

文学部 英語英文学科

小 論 文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
2. 試験開始の合図があったら、解答用紙の所定の欄に受験番号と氏名を記入してから問題にとりかかること。
3. 解答はすべて解答用紙の所定の欄に記入すること。
4. 試験時間は、9時30から10時30分までである。
5. 試験終了後、答案を回収する。問題冊子は持ち帰ること。

白百合女子大学

以下の文章は岩田祐子らによる『社会言語学』（2022年、ひつじ書房）からの抜粋です。これを読み、筆者の主張を200字以内にまとめ、それに続けて筆者の主張に対するあなたの意見を述べてください。合計で800字以内で書いてください。

（注意）本文に書かれている内容と関連させて意見を書くこと。

次の2つの会話を見てみよう。洋子さんはパートの仕事を持つ主婦、みちよさんはパート仲間と想定する。

- (1) 洋子 「なんだかね、最近疲れちゃってやる気なくてねー」
みちよ 「あら、大変。大丈夫？無理しないでね。あなたは子どもさんも小さくて、忙しいから」
洋子 「うん、ありがとう」

うちに帰った洋子さんは帰宅後の夫にも同じように言う。

- (2) 洋子 「最近疲れちゃって。やる気がなくて困るわ。」
夫 「んー。そんなに疲れるなら仕事やめちゃえば。別に生活に困ってるわけじゃないし。」
洋子 「いや、仕事やめたいとは思わないけど…」

会話の(2)で仕事をやめたらという夫に対して洋子さんは言い淀んでいる。(1)で「ありがとう」と言った展開とは異なる。(1)ではおそらく洋子さんは自分が期待した応えが返ってきて満足しているのであろう。しかし(2)の洋子さんは不満そうである。このような反応の違いはなぜ出てくるのだろうか。タネン(Tannen 1990) は男女の話し方のスタイルを文化差異として詳細に研究した。男女を文化差異として考えた萌芽的研究はマルツとボーカー(Maltz & Borker 1982)である。マルツとボーカーは男女はそれぞれ社会の下位文化の中で成長し、それぞれの文化に合った話し方を獲得するので、成人した男女間にコミュニケーション不全がある場合には、異文化コミュニケーションとして扱うことができるとした。つまり男女の下位文化では、会話の目的、ルール、解釈の方法が異なるから男女間の会話で誤解を引き起こすとしたのである。たとえば、相づちは女性にとっては「聞いています」というシグナルだが、男性にとっては「あなたに賛成です」という意味を示すものであるため、それまで相手の女性が賛成していると思い込んで話していた男性は、自分の発言の後で女性から反対意見を言われると訳がわからなくなる。逆に女性は相手の男性からあまり相づちが発せられないので不安な気持ちにおそわれる。

(中略)

さて先ほどの(1)と(2)の会話にもどってみよう。(1)ではみちよさんは洋子さんに「大変」と言って共感を示したうえで、「無理しないで」と気遣いを示すことばを発している。一方(2)の洋子さんの夫の発言には共感を表すことばもないまま、「仕事をやめる」という提案がされ、ダメ押しのように「生活に困っていない」と続く。洋子さんは自分のやる気のなさに対する解決策が欲しかったわけではなく、求めていたものは彼女のつらさに対する相手の「共感と理解」だったのである。だから夫からそれが与えられなかったとき、不満を感じたのであった。(2)は想像上の会話であり、会話の形式として問題があるわけではない。しかしタネンは男女の会話、特に夫婦や恋人同士のような親密な間ではこのようなすれ違いが重なって、次第に大きな誤解へと発展し、2人の関係に悪影響を及ぼす可能性があるとして述べている。

(中略)

上述のように分析された会話に対する期待が具象化したスタイルとして、タネンが提唱したのが、「ラポート・トーク」と「レポート・トーク」の分類である。ラポートとはrapportで、「気持ちの交流」という意味であるが、タネンは女性同士の会話で一般的に見られるスタイルが「ラポート・トーク」、男性同士の会話に見られるスタイルが「レポート・トーク」であるとした。「ラポート・トーク」においては相手と共感することが優先されるのに対し、「レポート・トーク」では共感よりも客観的な話し方が好まれる。(1)と(2)の会話例はこのラポート・トークとレポート・トークの違いであったのである。この異なるスタイルは、悩みごとや困っていることを打ち明けられた相手に対する応答の違いにもっとも顕著に現れる。タネンは、乳がんの手術をして片方の胸の喪失に悩んでいる妻の経験(実例)を載せている。妻が女友達にそれを伝えたとき、悩みを打ち明けられた女友達は「あなたの気持ちはとてもわかる」と言って慰めた。ところが同じ悩みを打ち明けられた夫は、「そんなに気になるなら整形手術をしたらいい」と言ったのであった。女友達には共感をもらったことで慰められた妻だが、夫の答えには大変傷ついたと言う。その理由は、妻が夫の発話を「夫は自分の胸がなくなったことに対し不満を持っているのだ」と解釈したからに他ならない。一方、妻の悲しみを心から思いやってアドバイスをしたつもりで夫は、彼女が傷ついたことを知って、逆に傷ついてしまったのであった。相手の気持ちを「わかる」といって共感を示す女友達と、「共感」より「解決策」をまず提示する夫は、相手を思いやることにおいては共通していながら、まさに話し方のスタイルが異なるために、夫と妻の間にすれ違いが生じてしまったのである。

村田泰美「言語とジェンダー」